

明治・大正・昭和初期 カトリック信徒の宣教活動

青 山 玄

昭和 61 年 5 月 19 日、筆者は上智大学神学会で「明治・大正・昭和初期東京教区信徒の宣教活動」と題し約 1 時間の研究発表をしたが、本稿はその時の題名を表記のように変更し、その草稿を多少改編補足したものである。第二ヴァチカン公会議の時以来、頻りに「信徒使徒職」という言葉が聞かれるようになったが、それ以前の時代にはこういう言葉は使われなかったとしても、信徒が積極的に使徒職活動を展開した例は、初代教会以来今世紀に至るまで枚挙に暇ない程多く、それは我が国のキリシタン時代や明治大正期のカトリック界においても例外ではなかった。もちろんその働き方は、時代や社会の変遷するにつれて色々と変化している。ここではその中、明治 10 年頃から昭和 10 年頃までの、東京在住司教の下での信徒の宣教活動とその性格、問題点等について考察してみたい。しかし、中でも特に明治前期の信徒活動に焦点を合わせて叙述し、その後昭和初期までの間にこの活動がどのように変貌したかを略述することにしたい。研究対象を時間的地理的にこのように限定したのは、たまたま筆者が縁あってこの時代この地方のカトリック教会の歴史について研究を依頼されることが多く、関係資料を多く収集しているからである。

周知のように、明治の東京在住司教は今よりも数倍広い地域を管轄しており、筆者の住む名古屋や北陸の信徒もその管轄下におかれていた。それが大正・昭和と時代を経る中にだんだんと狭められて、今日では東京都と千葉県だけの地域になってしまったが、ここではそういう管轄地域の変遷

については問題にせず、ただその時東京在住司教の管轄下におかれていたカトリック信徒の宣教活動について、任意に幾つかの実例を拾って考察してみたい。

1. 明治前期の東京およびその西方諸地方における信徒活動

明治の東京でのカトリック伝道は、維新政府が諸外国との所謂不平等条約改正のため、配流浦上キリシタンの待遇改善や国内諸制度の近代化に積極的に取り組み始めた明治4年の夏頃、築地・鉄砲洲の借家で始まったと思われる。諸史料を総合すると、この時幕末維新期の江戸に留学していて、4年7月の廃藩置県により生活に窮した各藩の藩費生たち多数を築地の宣教師の所へ連れて来たのは、仙台藩出身の竹ノ内寿貞という書生で、こうして宣教師の教えを聴くようになった書生たちが、また友人同僚を連れて来るため、プティジャン司教は1872年2月18日(明治5年1月10日)付け手紙に、「そこには既に200名以上の学生がいます」と書いている。¹⁾ この竹ノ内寿貞は、明治18年3月12日の砂川(即ち現在の立川辺り)の聖堂祝別式記事にも、明治4年の夏に砂川布教に尽力したように書かれている。²⁾

東京およびその周辺諸地方でのカトリック伝道に協力してくれたのは、まずこのような、新しい時代の波を鋭敏に感知し、先進諸外国のようになるための国造りに希望と生き甲斐を見出した士族出身者たちであった。東京で築地に次いで古い歴史を誇る神田教会も、全国各地から来ていたこういう進取の気性に富む旧藩費生たちと、長崎県出身神学生たちとのためのラテン学校〔神学校〕を基礎にして生まれた教会である。³⁾ 更に、東京で三番目に古い浅草教会も、元はと言えば、明治6年頃に築地教会で受洗した士族出身者本多善右衛門が、10年4月15日に創立した私立玫瑰〔まいかい〕学校から発展した、と言ってよいであろう。⁴⁾

しかし、カトリック伝道に活躍したのは、東京に来ていた旧藩士だけで

はなかった。同じ頃、八王子およびその周辺の農村部には、松井という医者や、塚本家・山上家・山口家・内山家などが入信して、一族友人を多く信仰に導いている。⁵⁾ 静岡県金谷の中田源蔵も、その地方の多くの貧困労働者を信仰に導いた。⁶⁾ 岐阜県本巣郡春近村で医者の子として生まれた井上秀斉も、明治8年に上京して同年8月に受洗し、ラテン学校に入って神学生となったが、明治11年の夏休みに帰省する時、恩師ヴィグルース神父 (F. P. Vigroux, 1842~1909) を故郷にお連れして、村人たちに教を説いてもらったり、身内の者に洗礼を授けてもらったりしている。⁷⁾ ヴィグルース神父は、この年の春と夏に同じく神学生の田村匡交の案内でその故郷浜松を訪れ、26名に授洗して浜松伝道の基礎を据えた宣教師である。⁸⁾ 井上秀斉は、その後待祭にまで昇り、そのまま進めば東京教区最初の司祭になる筈であったが、オズーフ司教は副助祭叙階前の調査の時、秀斉が長男で弟がなく、当時の日本社会では家業を継ぐべき身である事を考慮して許可せず、秀斉は、15年暮に家に帰された。しかし、伝道の望みは捨てず、老父を助けて医業に従事する傍ら、明治22年まで一週間の中半分は、名古屋・岐阜・大垣・高須・土岐の五つの講義所を巡回して多くの人を信仰に導いていた。秀斉自身の言葉によると、「毎週40里（即ち約160キロ）の道程を郵便配達夫のように」急ぎ足で歩き回っていたようである。⁹⁾ こうして一々例を挙げると切りがないが、当時各地の農村部には、外にも諸外国の文明に立ち遅れて貧困に悩む日本社会の近代化のため、熱心に人助けに努めながら、事ある毎に人々にキリスト教信仰と受洗を勧めて止まない信徒が少なくなかった。

横浜を拠点にして、明治9年以来そういう農村部への巡回伝道に従事し、次第にその巡回地域を東京近郊から岐阜県までの西方諸地方に広げたテストヴィド神父 (G. L. Testevuide, 1849~91) は、明治16年には9月20日から12月20日までの3ヶ月を費やして、横浜—砂川—八王子—小田原—下田—松崎—御殿場—沼津—静岡—浜松—豊橋—名古屋—岐阜と、四百数十キロに達する徒歩旅行を続けて約50ヶ町村を訪問、36名に洗礼を授

け、別に求道者 22 名を獲得した。その殆どは何れもその地その地の信徒から信仰を勧められ指導されて、神父に紹介された人々であった。テストヴィド神父は、この時の大旅行についてかなり詳しい報告書を書いているが、¹⁰⁾ その後も数回同様の旅行をなしており、その旅中にライ病者に遭ったことが切っ掛けで、22 年には御殿場にそういう人たちのための病院を創立している。

—— 当時は東京・横浜などの大きな都市以外には宣教師の常住する教会がなく、テストヴィド神父が担当していた地域では、この時点で八王子・藤枝・浜松に年 1、2 回乃至数回宣教師の来訪する巡回教会があっただけであった。しかし、教会堂から遠く離れていても、信徒は真の神と真の宗教を見出した喜びに溢れて、自主的に伝道に努めていた。

2. 明治前期の千葉県信徒の活動

この明治前期の段階で信徒が農村伝道に最も活躍した地域の一つは、千葉県であった。そこでは福島県出身の信徒平田友雄が、警察官として立派な業積をあげる傍ら、自分の信仰を隠さずに同僚の警察官とその家族、および助けを必要としている住民たちに勧めて信仰者を増やし、信徒同志の新しい助け合い集団の形成に努めていた。後年伝道士となって活躍した警察官牧野泰蔵を信仰に導いた時には、まずカトリック書を贈ったそうである。度重なる上司からのこの好意と呼びかけがあった上で、自分を尋ねて 3 ケ日間も三里塚とその周辺諸地方を探し回っていたというフランス人宣教師ヴィグルース神父に出遭った時、牧野は遂に受洗した。¹¹⁾

当時の千葉県は、農業・漁業の隆盛に加えて沼地の干拓、牧場経営、水上交通の発達などにより、豪農豪商の数も多く、「東京の裏口、お台所」と言われたほど、食品関係業の盛んな所であった。幕末に 16 藩も割拠していたこの房総の地に、明治元年になって更に 7 藩も駿河・遠江から移封されて来たのだから、一時は無数の他国出身士族がひしめきあっていたという

感じであったと思われる。そこに廃藩置県という追い討ちがかけられたのだから、失業して生活に窮した彼等士族出身者の中には、既に自分の故郷から解放され離れていたこともあってか、新しく工夫して生き抜く進取性を発揮したり、新しい生き甲斐を模索したりする者たちが少なくなかった。当時の千葉県信徒の大多数は、このような士族出身者とその家族で、彼等は教会堂から遠く離れた千葉県北・中・南部の村々町々に散在して生活していたが、日曜日にはその地の主立った信徒の個人宅で祈りの集会を開いていた。

例えば、千葉県中部の鶴舞の信徒団について、17年2月16日の『公教萬報』には次のように書かれている。

「此の地には奉教人五十名あり、何れも信心堅固の人々にて、よく教律を守れり。これ同国茂原の伝道士が度々巡回して教理を講義するのみならず、ペトロ安在氏、ペトロ岩崎氏、ジョアン洗者早野氏の三名が、奮発勉強してよく教導せし故に、多くの信徒を勧誘せしめて斯く盛大を極むるに至りし也。其のペトロ岩崎氏は、日曜日ごとに我が家を明け渡して、奉教人の為に集会所となし、自ら志願して伝道を事となし、衆人を勧め、よく教理を会得したる熱心至極の人なり。此の三人は言ふに及ばず、鶴舞の奉教人の信徳熱心なる事は、実に感伏に堪へず、古昔致命[昔 殉教]の奉教人の如く、如何にも実直なる信徒なり。」

——ここで岩崎氏とあるのは、後年築地教会で活躍した岩崎重雄伝道士である。前述した愛知・岐阜両県での井上秀斉の五つの講義所も、あるいはこのような信徒または求道者の個人宅であったかも知れない。

年に1、2回、多くても3、4回の宣教師来訪の時は、日曜日でないことも多いが、同じ個人宅でミサや洗礼志願者の教理指導があり、場合によっては洗礼・結婚の式も挙行されて、ささやかながら楽しい一時を過ごすというのが、教会堂のない巡回宣教地での信仰生活だったのであろう。一種の「ホーム・チャーチ」と言ってよいこの個人宅の言わば家庭祭壇を、当時

の求道者は度々訪問して先輩の信徒たちから教理や祈りや信仰生活の仕方を学び、宣教師来訪時に簡単な仕上げの教理研究をなして、受洗していた。求道者がこういう一種の仮教会に度々来れない場合には、伝道士がその家を訪問して教えていた例も知られている。¹²⁾

当時宣教師 1 名につき大人の改宗者が、明治 14 年度を除き、北緯日本教区で毎年平均 30 名前後を記録していたのは、¹³⁾ 主として信徒が身近の人々に対する宣教意欲に燃えていたからではないであろうか。明治 11 年以来、東京の築地教会を拠点として、千葉県を始め関東東北部諸地方の巡回伝道を担当していたヴィグルース神父は、明治 15 年春に千葉県中部の諸村を 25 日間巡回して、39 名に洗礼を授けたが、この時、例えば前述した鶴舞村では村人が百名余りも来聴し、神父に続いて一信徒が、自分が何故キリスト教を信じたかの入信理由を説明して、来聴者一同に深い感銘を与えている。神父は同年秋にも、同様にして千葉県中南部の諸村を 3 週間巡回し、32 名に洗礼を授けたが、何れも信徒がその下準備をしている。信徒はその外、宣教師不在中の幼児洗礼・葬儀なども執行していた。¹⁴⁾

このようにして明治 24 年には、千葉県の信徒総数が殆ど千に近い数に達した。宣教師の常住する教会が一つもなく、宣教師の建てた巡回教会は、史料で確認できる限り 15 年春に建設された千葉教会と 16 年秋に建設された茂原教会との二つだけという千葉県に、わずか 10 年程で信徒数がこんなに増大したのは、種々の記事にはっきりと反映しているように、何よりも信徒自身が自分の信仰に大きな喜びと安らぎを見出して相互に深く愛し合い助け合っていたことと、この幸せを一人でも多くの人に伝えようと積極的に努めていたことのお蔭であろう。——宣教師の常住していた東京諸教会では事情が多少異なり、それぞれの教会の色彩も違っているが、しかし、信徒が相互に助け合い、一人でも多くの人を信仰に導こうと努めていた点に変わりはない。¹⁵⁾

3. 明治前期の信徒活動の特徴

前述した信徒活動をよく吟味してみると、そこに次のような三つの特徴があることに気づく。

A. 16、7世紀のキリシタン時代に似て、宣教師不足と困窮家庭激増という事情のためか、信徒、しかも男の信徒が教会内で活発に活動しており、時間にしろ、人助けのための労苦や食物にしろ、あるいは日曜日の集いのための家屋にしろ、貧しい信徒たちが自分にとって貴重と思われるようなものを、自主的に快く提供していること。

——公のため、一族のため、自分の精神的名誉のために生きる、という生き方に慣れていた当時の日本人、特に士族出身者にとり、このようにして皆のために乏しさに堪える、自分のものを犠牲にするということは、ごく当たり前のことであつたかも知れないが、自分にとって貴重なものを皆のために快く提供し合い犠牲にし合う所には、真の兄弟愛と強い一体感が大きく盛り上がったことであろう。友のため命までも捧げたキリストの愛と内的喜びの恵みは、このような素地のある所に生き生きと働くのではなからうか。初代教会や16、7世紀のキリシタン宗団を生かしていたこの自己犠牲的共同体精神が、百年前の日本の信徒たちの間にも見られたように思う。そして当時のフランス人宣教師たちが伝道に成功した一つの秘訣は、このような仕える精神を絶えず新たに鼓吹し磨き上げるようなものを、自分の中に豊かに所有し実践していたことにある、と見ることもできよう。当時「カトリック者になる」とは、教養あるフランス人宣教師たちの指導する、このような美しい家庭の助け合い集団の一員になることをも意味していた、と思われるからである。

こういう集団の一員になった信徒、特に男子信徒は、その暖かい建設的ムードの中でかなり自主的に活動しており、例えば東京の浅草教会では、

明治13年に信徒10名が発起人となって募金し、埋葬用具一式を調べたり、葬式費用を補助するため喪助会を創立したり、翌年には谷中墓地を入手して整備したり、その他様々の自主的活動を展開している。¹⁶⁾ 我が国最初のカトリック雑誌『公教萬報』を14年5月に発刊したのも、浅草教会の信徒本多善右衛門であった。17年には、浅草教会の信徒朝倉達三が築地や神田の信徒たちにも呼び掛けて、「公友会」と称する知識人信徒の会を組織し、同年6月8日、日本橋区馬喰町の群臺樓に600名余りを集めて「學術演説会」を開催しており、10月5日にも同じ群臺樓で盛況裡に「公教演説会」を開いている。9年から12年3月まで公立の松前（後年の育英）、柳北両小学校世話係を勤め、その後浅草区柳北女学校校務委員を、14年から浅草区学務委員を務め、同時に13年8月からは浅草区区議員としても活躍していた朝倉は、18年10月に浅草教会敷地内に創立したこの小学校は、当初からかなり特色ある教育を施し、明治41年3月まで続いている。¹⁷⁾ これらは、もちろん主任司祭の監督・指導と協力・援助の下に展開された活動ではあるが、そのこと自体、信徒の自主的活動であったことは、注目に値する。

B. カトリックの教理や聖書については、ごく基本的な事以外殆ど知らない信徒が多かったように思われることと、にも拘わらず、信徒が宣教師を介して神と結ばれ、神を支点として日本社会の発展向上のために働こうとする、キリスト者としての誇りと社会的使命感とに燃えていたこと。

——当時の日本社会は、小豆粒のようにてんでんばらばらの人間が大勢集まって人為的に構成しているような、言わば都市型の自由集団社会ではなく、2千数百年來の水稲栽培から生まれた血族的部落的運命共同体の名残をまだ濃厚に留めていた社会であった。たとえ東京のような都会に住みつき、時代の先端を行く進歩発展の最中に生活していても、多くの人は實際上それらの進歩発展を手段としているだけで、心の中では自分を生み育ててくれた親族・故郷・旧藩などへの強い心情的愛着を保持していたよう

である。家のため国のために生きることを本分として来た土族出身者の多いカトリックの信徒集団においても、この傾向は強かったようで、眞の神を見出した信徒の喜びは、親族・同郷・同藩の誼を介して多くの近しい人々に早い段階で伝えられ、広められている。小さくても身近な所から、信仰に生きる人たち同志の新しい助け合い集団とその恒久的組織を造ろうと、積極的に努めていた浅草教会信徒の前述例も、当時の信徒の社会性とその使命感の大きさを示すものであろう。

しかし、それにしても、知識の習得が不十分なのに伝道意欲の旺盛な点は、注目に価する。東京教区最初の『天主公教要理』が明治 22 年に出版され、明治カトリック界最初の印刷された日本語聖書、即ちステーヒェン神父の口述に基づく高橋五郎訳の『聖福音書上』が 28 年、『聖福音書下』が 30 年の発行であることを思うと、既に述べた岐阜県の井上秀斉や千葉県の牧野泰蔵ら、多少なりとも東京の神学校乃至伝道士学校で勉強したことのある少数者を除くなら、信徒は一般に、日曜日毎の信徒集会で聖書や教理の話もよくできなかつたであろう。しかし、察するに、宣教師来訪時に聞いた聖書や教理の断片的な話を思い出しながら、それらを各人の体験・思索と合わせて話し合っていたのではなかろうか。そして相互のこういう話し合いから生じた疑問は、次の宣教師来訪時にまとめて提出され、宣教師は、それに答えて様々な譬を用いながら、更に多くのことを判り易く教えていたのではなかろうか。¹⁸⁾

いずれにしろ、百年前の信徒は、無数の本やその他のマス・メディアから短時間に多くの知識を摂取できる現代人に比べると、聖書や教理についても量的には遥かに少ししか知っていなかつたであろう。しかし、自分たちの質問や何かの具体的体験と関連して聞いた宣教師の言葉は、心にいつまでも印象深く木霊して、よく消化されていたのではなかろうか。筆者は、20 年前 30 年前頃に、既に故人となられた関キヌ、安田忠治、白川友吉、成田朝治郎ら、新潟県や東北地方出身の明治大正時代からの古い信徒を数人訪問し、その思い出を細かく書き取ったことがあるが、その際に、昔の信

徒が事宜教師の話した言葉については、実に印象深く記憶しているのに驚いたものである。恐らく一度聞いた言葉や譬話を幾度も繰り返して味わい、他の人々にも語り継ぐように努めていたのであろう。余りにも多くの知識で、言わば頭でっかちになっている我々現代人に比べると、彼等の心は遥かに身軽で、「もっと知りたい」という意欲に溢れており、宣教師の来訪を楽しみに待っていたようにも思う。明治前期の信徒も、同様だったのではなからうか。宣教師の去る時には、信徒が別れを惜しんで数キロも伴ってから別れた、その時多くの涙を流した、という例も幾つか伝えられている。¹⁹⁾ 長年藩主を主君として仰ぐことに慣らされて来ていた当時の信徒たちは、無意識の裡に基督教の神を言わば自分たちの新しい主君と仰ぎ、宣教師をその代理者または使者として感じていたのかも知れない。もしそうだとすると、外的には多くを知っていなくても、この神中心の待つ心、飢え渴く心によって内的に聖霊の照らしと導きを受け易くなっており、一を聞いて実践的に二、三、いや五、六を悟ることも稀ではなかったであろう。ここに、具体的体験や日常の経験的事実と結びれて発展する、下からの信徒神学の一つの萌芽があるのではなからうか。そしてこの体験が、明治前期の信徒たちをキリスト者としての誇りと社会的使命感とに燃え立たせていたのではなからうか。

C. 神の不思議なお導きや、病気・災いからの奇跡的救い、また自分の祈りが不思議に聞き入れられた、などの体験をもっている人の多いこと。
しかも、特に聖母の崇敬・聖母の取り次ぎを願うことによって不思議な恵みに浴した人の多いこと。

——こういう例は、全国各地にかなり多く伝えられているが、ここでは百年前の千葉県信徒の例から幾つか拾ってみよう。

[例1] 茂原町の風戸カクという49歳の貧しい婦人は、毎晩ロザリオ1串と十字架の道の祈りをなしている信者であるが、信仰のために転職して日

曜日毎に休ませてくれる別の家に勤めていた。ところが、明治15年11月28日午後3時頃、手桶の底が抜けて沸騰した熱湯をことごとく足袋を履いた両足にかぶせてしまった。本人は罪の償いと観念して、少しも騒がずに足袋を脱ぎ始めたが、雇い主初め居合わせた人々はあわてて、「それ猿澤、やれ上の字の御守りを」と立ち騒いだ。本人は呪などは迷惑と断りながら、足袋を脱いでゆでだこのように脹れ上がって痛む両足を出し、痛みを色に表さずに、自分は天主教の信者であるからただ天主様に願い奉るのみと、衆人の前で悠然と「三大経」〔主の祈り、天使祝詞、栄誦〕を唱えた。すると忽ち痛みが去り、すぐに台所に出ていつものように立ち働き、湯に入っても平常に変わらなかった。婦人はその夜仮教会所〔信徒の家〕に来て伝道士に報告し、一緒に感謝の祈りを捧げたと言う。²⁰⁾

〔例2〕千葉県庁に奉職する官吏高石欣吾の老母高石ヤス（70歳）は、受洗後、生国安房長狭郡に住む妹たちにもこの教えを勧めようと思立ったが、平生船酔いし勝ちの性なので聖母のお助けを願い、他の信者たちにもロザリオを唱えてくれるようにと依頼して、信心を肝に銘じながら船出した。すると風がひどく吹き出して、船はいったん浦賀に着いた後、安房へと進み、同船者たちは船酔いで横臥した程なのに、老婦人は往復とも船酔いせず無事目的を達成した。その息子も、このことを聞いて大いに感動したが、この老婦人の船旅が安房伝道の端緒になった。²¹⁾

〔例3〕明治15年11月6日に妻ほか二人と一緒に受洗した安房長狭郡での最初の信徒の一人原空三郎（71歳）は、毎日毎晩規定の祈りとロザリオを唱えるのを何よりの楽しみとしていた。しかし、受洗後一ヶ月半程して大病にかかり、2週間後には食事も薬も喉を通らず、起臥もままならない重態に陥ってしまった。約1時間毎に恐しい激痛が来て、目も当てられない程苦しんでいた。医者は「年老いての大病故、全快は望めない。たとえ死なないとしても長患いになる」と言った。その恐しい苦痛が二昼夜続いた後の朝方、見るに忍びない苦しい氣息と共に既に臨終の様相を呈してい

た。——看護していた身内の者たちは、洗礼は受けているので死んでも安心だが、この房州で初めてこのような有り難い道に入った四人の内の一人が僅か2ヶ月で死ぬなら、異教徒から悪し様に言われるであろう。それが口惜しい、と一心に聖母に憐れみを祈り求めたが、ロザリオ1串を唱えていたその時、今まで一人では起臥もできず一言も話せなかった病人が、突然床の上に安坐し、厠（かわや）に行きたいと言い出した。驚いた身内の信徒マリアとポーラが備えの尿器を差し出すと、病人はぜひ厠に上りたいと言って二人に助けられて行き、厠から帰ると、その日の朝の食事いつものようになして全快した。異教徒も感嘆したこの出来事については、間もなく東京の築地教会に1300字程の奇跡報告書が提出された。²²⁾

〔例4〕千葉県在住の士族出身者山口直シヅ(30歳)は、明治16年1月25日に受洗後、同年11月8日に千葉県病院に入院したが、毎日耳の悪い親のため、字の読めない妻のため、また自分のため、千葉の信者たちのためにロザリオ4串を唱えていた。暫くして快気に向かい、間もなく退院できると思われていた11月26日の夜、家で幼児に乳を飲ませながら横になっていた未信者の妻が、枕許の畳の上を麻か何かを軽く引き摺るような物音に目を覚まし、頭を上げてみたら、頭から裾まで白いヴェールをかぶった婦人〔聖母〕が向こうの方へ歩いていく幻を見た。その夜はそのまま眠れず、翌朝病院に駆けつけたら、自分が幻を見たのと同じ時間帯に夫の病状が急に悪化し、大病になっていた。二日後の夜にも、同様の幻を見たので、思わず「マリア様ですか」と言ったら、にこにこ微笑まれて消え失せた。今度は死去したのではないかと心配して、夜が明けてすぐに病院に駆け付けてみたら、夫はその前夜の同じ時間帯に急に全快していた。妻は、自分もキリスト教を信奉しなければと思い、夫にも言わずに一人で教会へ行ったが、聖堂にある聖母像が自分の見た御姿とそっくりなのに驚き、益々有り難くなって、間もなく受洗した。この出来事についても、東京の築地教会に1500字程の奇跡報告書が提出されている。²³⁾

事によると、百年前頃のカトリック教会は、日本の一部の地方で、他のどの宗教よりも霊驗あらたかな宗教とされていたかも知れない。こういう不思議な体験とその縁起だけが信仰生活の中心になるなら、現世利益の宗教にもなり兼ねないが、しかし当時の信徒は、宣教師から救霊のための教えを学び、定められた掟を忠実に守って清く生きること、敬虔に感謝し祈ることを第一にしており、²⁴⁾ この実践の中で度々そのような不思議を体験していたので、その体験は教えの真理を実証するものとして心に深い感銘を与え、彼等の信仰を堅めていたように思われる。祈りが聴き入れられた体験によって彼等の心が神を身近に感じていたなら、人に信仰を勧める彼等の言葉にも力がこもり、宣教活動の成果を大きくしていたのではなかろうか。

4. 明治後期・大正・昭和初期の信徒活動

わが国各地のカトリック信徒団が、このようにして漸く大きく発展し始めようとした矢先に、ローマ教皇庁布教聖省からの新しい指導方針により、宣教師が稀にしか訪れない、言わば信徒の家を拠点にしたホーム・チャーチ式伝道は許されなくなってしまった。これは、1879年6月29日付の布教聖省の教令に基づき、明治23年3月に長崎で開かれた教会会議とその後の布教聖省からの指導により、明治26年から施行された変更で、第一ヴァチカン公会議の精神に従い、全世界のカトリック教会がローマ教皇を中心として一致団結を固めるため、また近代思想の危険な流れに抗して信仰の遺産を守り抜くため、信徒主導型の活動を抑制し、聖職者の監視の下で規則に定められた通りの信仰生活を営ませることを目的としていた。当時の教皇庁では、世界各地の聖職者や信徒が近代思想の毒に侵されてローマ教皇と違う多種多様の新しい考え方をしたり、西欧教会の古い伝統を変えたりすることに、極度に警戒していたようである。²⁵⁾ こうして始まった布教地における信仰生活・宣教活動の西欧化のため、ごく少数の例外を別にす

ると、宣教師は一般に、明治 20 年代後半以降それまでのような巡回伝道や家庭ミサをしなくなり、求道者は宣教師から短時間仕上げの教理指導を受けて受洗することができなくなって、信徒も日曜日毎に、少なくとも守るべき大祝日毎には、宣教師の常住する教会乃至度々巡回する教会でミサに与らなければならなくなった。

こうなると、教会堂から遠く離れた農村部諸地方でそれまで栄えていた信徒による宣教活動は総崩れとなり、丁度わが国の社会も 22 年の大日本帝国憲法の発布ごろから次第に大きく変わり始めた時なので、カトリックの田舎伝道はすっかり衰えてしまった。一部の信徒は、農村部の諸地方から宣教師の常住する教会や宣教師が頻繁に来訪する巡回教会のある町々に移住したが、しかし宣教師の殆ど来なくなった田舎に留まり続けた信徒で、結果的には教会から離れて行った者も少なくなかった。ローマ教皇庁からの指導が大正期と昭和初期に次第に緩和され柔軟路線を辿り始めても、地方伝道が長く伸び悩んだ原因の一つは、その後遺症にあると行うことができよう。しかし農村伝道の伸び悩んだ一番大きな原因は、日清戦争前後頃から高まって来たナショナリズムにあり、これが国家神道や軍国主義と結びついて、農村部に住むすべての人の生活に目に見えない抑圧と規制をかけていたため、と言ってよい。

そういう抑圧や規制から比較的自由であった都市部、特に宣教師の多く常住していた東京の諸教会では、前述した長崎教会会議、及びその 5 年後の明治 28 年春に開かれた東京教会会議によって、種々の引き締めや監督体制の強化が導入されても、明治 30 年代に入ると、信徒はそれらすべての規定を守りながら、新たな形で積極的に宣教活動を展開し始めている。例えば、明治 34 年 9 月 29 日に諸教会の信徒を会員として発会式を挙げた公教教友会が、同年 10 月から頻繁に各地で開催した「公開演説会」は、東京大司教を初め諸宣教師の積極的援助協力を受けてはいるが、聖職者はすべて名誉会員として出席参与しているので、それ自体としては信徒の知的研究と伝道活動であった、と行うことができよう。同じ 34 年 6 月諸教会信徒の

協議会で決定され、同年 10 月から毎年 2 回会場持ち回りで開かれた東京六教会の伝教士・教会委員懇談会〔伝道士は当時伝教士と呼ばれていた〕も、信徒による自主的活動で、すぐその初回から、神田の養育院救助費の寄付集めや、各教会信徒の求婚者名簿の作成と交換などを決議・実行し、その後も様々な企画を協議し、諸教会が連合して実施している。これも信徒による自主的活動であった。更に、公教教友会と協力してカトリック布教の推進に努める青年たちが 35 年 6 月に創立した公教志向社、37 年 11 月創立の公教婦人会、大正 5 年 6 月に暁星中学校で発足した公教青年会、この公教青年会が大正 12 年 1 月に発刊した『公教青年時報』〔同年 5 月『カトリック・タイムス』と改題〕等々は、何れも信徒が自主的に企画し、宣教師に協力を願って展開した活動であって、決して宣教師が企画し、信徒がそのお手伝いをしたのではなかった。

しかしその間にも、前述した教皇庁中心の指導体制が長引くと、全世界どこに行っても規則と宣教師の指導に忠実に従うだけ信心深いだけの受動的カトリック信徒が多くなったためか、昭和初期に入ると、教皇ピウス 11 世が頻りに *Actio Catholica* を唱道し、それに基づいて東京のシャンボン大司教は、従来公教青年会が発行して来た『カトリック・タイムス』紙を、昭和 6 年 1 月より『日本カトリック新聞』と改称させて、新設されたカトリック中央出版部から発行させることとし、6 年 3 月 21 日の公教青年会第 16 回総会の席上、ジャルディニ教皇使節とキノルド札幌司教列席の前で、「東京教区におけるアクション・カトリックについて」と題する、日本語で 3200 字程の教書を発表した。公教青年会はこの教書に基づいて直ちに解散され、爾後信徒は皆小教区毎に組織されて、小教区主任司祭の監督・企画・指導に従って活動することになった。大司教は、その教書の結びの部分で次のように述べている。

「そこでその組織を次の如く具体的に定めて之をわが東京教区に於いて実行しようと思ふものである。

- 一、各教会に於いてその主任司祭のもとに次の四の団体を設立する。
即ち青年会、壮年会、処女会、婦人会である。
- 二、教区の団体は、各教会の団体から成立つものである。
- 三、司教は、総指導司祭をして教区の凡ての団体を指導せしめる。
- 四、教会の団体以外に、司教は教区内の学生連盟の如き特殊の団体の存在を認める。
- 五、総指導司祭は、近日中に任命せらるるであろう。
- 六、青年会指導司祭も亦、近き将来に於いて決定せらるるであろう。

最後に注意し度い事は、之等の指導司祭の使命は布教の精神を鼓吹することであり、又アクション・カトリックに対する必要な知識を信者に与えることである。然し茲に特に誤解を避くべきことは、それが従来教会内に存在した種々の信心会と混合さるべきものでないといふ事である。換言すれば、アクション・カトリックは、個人の霊的生活の向上を目的とするといふよりは寧ろ平信者伝道そのものを対象とするものである。かかる信心会がアクション・カトリックに大いなる援助を与え得るは勿論である。けれ共それはアクション・カトリックの本質と看なさるべきではない。……」²⁶⁾

上述の第四項からも明らかなように、信徒のすべての活動が各主任司祭の指導の下に置かれたわけではなく、新聞その他の執筆出版活動に従事する信徒や、各大学乃至カトリック校の学生グループに属している信徒は、まだかなり自主的に活動できたのであり、一般的には、特に受動的信徒の多くなっていた大多数の教会では、主任司祭が中心になって競って企画し推進するこのアクション・カトリックにより、低迷していた信徒活動が盛んになった、と言ってよいであろう。しかしそれは、以前の自主的信徒活動とはかなり性格を異にするものであり、主任司祭の交替その他の外的原因によって大きく左右され易い活動でもあった。

大正期および昭和初期に、信徒が新聞および各種月刊誌に寄稿した回想

文や体験文を調べてみると、折れば聞き入れられると体験的に確信し、神の働きを身近に感じている信徒が、少なくなかったように思われる。²⁷⁾ 多くの信徒は神とのこの個人的内的結び付きの中に自主的活動の場を見だし、外的活動の難しい社会事情・教会事情の中にあっても、信心会などに属して実りある信仰生活を営む傍ら、折ある毎に友人・知人にも入信を勧める私的な伝道活動が続けていた、と考えてよいであろう。もしそうだとすると、男子信徒が小教区の枠を越えて自主的に活動組織を形成・運営していたことと言い、社会的使命を自覚し誇りをもって活躍していたことと言い、更に神の働きを生き生きと実感していた信徒が少なくなかったことと言い、この時代にはまだ明治前期の信徒の生き方・働き方の伝統が続いていた、と言ってよいであろう。

昭和10年代に入り日本社会が軍国主義化すると、祈りが聴き入れられたという体験をもつ信徒の密かな伝道活動も社会的に抑圧されたが、しかし信徒のこのような生き方・働き方の名残は、戦後の昭和25年頃までまだ濃厚に残っていたように思う。その後日本人が忙しくなり、豊かになり始めると、深く祈る信徒、神の働きを身近に感じている信徒が少なくなり、宣教活動の成果もあまり上がらなくなって来たのではなかろうか。近年は更に、子育てを終えた女子信徒たちが小教区信徒団の中で大きな勢力を持つに至り、一部の教会では主任司祭にある種の譲歩を余儀なくさせる程にもなって、この偏向から生じ易い感情的派閥争いが屢々密かに伝道成果を阻害しているように見受ける。伝道活動の主導権を聖職者にだけ保持させたアクション・カトリックにも、その責任の一端があったのではなかろうか。20年程前から「信徒使徒職」という言葉が頻りに叫ばれるようになったのは、四百年前、あるいは百年前、五十年前に、信徒のそういう活動がなかったからではなく、近年自主的信徒活動が乏しくなって来ているので、神学的にその性格を一層明確にし、強調しているのだと解したい。

結 語

マルコ福音書に福音宣教の原点を探てみると、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」(マルコ、1の15)と言われた主は、まだその教理を十分に教えない中に、自分と共におらせるため、また悪霊を追い出す権能を与えて宣教に遣わすため、言わば神からのメッセージの使者として使徒たちを選び、派遣しておられる。自分と共におらせたのは、神による救いを身近に見聞し体験させるためであったと思われるが、もしこのようにして神による救いの福音を人々に宣べ伝えるのが信徒使徒職であり、聖書や神学についての学問的研究はしていなくても、自分の祈りと救いの体験と聖書読書に基づいて考え話し合うのが信徒神学であるならば、種々の時代の制約から来る止むを得ない不完全はあったとしても、明治大正期の信徒も、彼等なりに立派に福音に基づく宣教活動・神学活動をしていたと言ってよいであろう。そしてその活動を更に細かく吟味してみると、聖職者の自主的活動と信徒の自主的研究・伝道活動とが、ちょうど左右二つの翼のように、あるいは夫と妻のように、互いに相手を大切にし対等に調和よく協力し合っていた時に、最も持続的に伝道成果を挙げていたように思う。

注

- 1) Cf. “Les Missions Catholiques” No.150 / 19. avril 1872 / Correspondance — Japon.
- 2) 『公教萬報』第94号、明治18年4月1日発行、p. 2 参照。
- 3) カトリック神田教会『百年のあゆみ』(昭和49年10月10日発行)所収の拙稿「神田教会百年史」pp. 18~28; 『つきじ』献堂百周年記念号(昭和53年12月25日発行)所収の拙稿「想起——百年の記録」pp. 55~59 参照。
- 4) 青山玄編著のカトリック浅草教会創立百周年記念誌『百年のめぐみ』(昭和52年6月26日発行)pp. 16~20 参照。
- 5) 『八王子教会百年』(昭和52年11月発行)所収の年譜と「メイラン神父の手記」pp. 11、20~21 参照。

- 6) Baudu, Pierre G. “La Mission de Shizuoka” (1959) pp. 19~20, 24~30; 小林元編著『聖アンナ教会百年史』(昭和53年11月発行)所収「藤枝教会百年の歩み」pp. 32~37 参照。
- 7) 『布教』1971年6月号所収の拙稿「明治のカトリック愛知・岐阜県布教(2)」pp. 273~274 参照。
- 8) 佐々木忠夫編著『浜松カトリック教会百年史』(昭和53年5月発行) pp. 3~4 参照。
- 9) 『布教』1971年9月号所収の拙稿「明治のカトリック愛知・岐阜県布教(3)」 pp. 453~454 参照。
- 10) この報告書は1884年の“Les Missions Catholiques”誌に連載され、F.マルナス神父の“La Religion de Jésus ressuscitée au Japon, dans la seconde moitié du XIXe siècle” 2. vol. (1896) pp. 394~409にも部分的に引用されているが、山口鹿三によるその全文邦訳が昭和14年の『声』誌7~11月号に連載されている。
- 11) 千葉教会創立百周年記念誌『聖母と共に』(昭和58年11月23日発行)所収の拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」pp. 29~30; 鈴木習之著『天国を奪う人々』(昭和41年4月中央出版社発行) pp. 66~67 参照。
- 12) 例えば前掲拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」p. 37 参照。
- 13) バリー外国宣教会年報によると、1878(明治11)年から6年間の宣教師(司教・司祭)数と大人の受洗者数との統計は、次のようになる。

年度	教区	宣教師数	信徒数	大人の受洗	離教からの改宗
1878	北日本	20	2,164	666	4
	南日本	19	17,380	1,197	505
1879	北日本	21	2,766	622	10
	南日本	19	?	1,314	0
1880	北日本	22	3,263	576	3
	南日本	21	20,646	1,702	5
1881	北日本	23	3,547	383	2
	南日本	23	22,086	842	0
1882	北日本	24	4,094	649	8
	南日本	25	23,000	623	1
1883	北日本	25	4,855	676	32
	南日本	26	24,359	649	3

従って北緯日本教区の大人の改宗者(隠れキリシタンやプロテスタントなどからの改宗者も含む)数は、宣教師1名につき次のようになる。

1878年度 33.5名, 1879年度 30.1名, 1880年度 26.3名
 1881年度 16.7名, 1882年度 27.4名, 1883年度 32.3名

- 14) 『公教萬報』第25号、明治15年5月1日発行、pp. 2~6; 第39号、明治15年12

月1日発行、pp. 5～6；前掲拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」pp. 38～43 参照。

- 15) 例えば前掲拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」pp. 31～34, 59～69 参照。
- 16) 『浅草教会記録簿』第壹巻、明治十三年と十四年の項参照。
- 17) 前掲のカトリック浅草教会創立百周年記念誌、pp. 29～31 参照。
- 18) 当時の宣教師たちのそのような教話の例は、例えば新井勝三郎編『柝の落葉』（昭和7年11月初版、57年11月改定四版発行の私家版）に数多く収録されている。
- 19) 例えば『公教萬報』第51号、明治16年6月16日発行、p. 15；第71号、明治17年4月16日発行、p. 1 参照。
- 20) 『公教萬報』第40号、pp. 2～3 参照。
- 21) 『公教萬報』第39号、pp. 5～6 参照。
- 22) 『公教萬報』第51号、pp. 2～4 参照。
- 23) 『公教萬報』第51号、pp. 4～6 参照。
- 24) 明治16年9月16日の茂原教会の献堂式に同教会の藤井治和伝道士は、同地の信徒を代表して祝辞の中に次のように述べている。

「抑モ教堂ノ要トスル處四アリ 第一靈魂救護ノ爲メ天福ヲ降授スル所ナリ 第二恩謝奉獻ノ爲メ祭ヲ捧グル所ナリ 第三天理ヲ弁ヘ人道ヲ固守スルガ爲メ説教ヲ聴聞スル所ナリ 第四教友心ヲ一ニシテ祈禱ヲ捧グル所ナリ」(『公教萬報』第59号、p. 5 所収)

察するに、これが当時の信徒が真っ先に心がけていた事であろう。

- 25) 『宗教研究』第52巻第3輯（昭和54年2月発行）所収の拙稿「明治二十三年のカトリック日韓合同教会会議の性格」pp. 149～151；『宗教研究』第53巻第3輯（昭和55年2月発行）所収の拙稿「明治二十八年のカトリック東京教会会議」pp. 133～134 参照。
- 26) 『日本カトリック新聞』第285号、昭和6年3月29日発行、第三面所収。
- 27) こういう回想文や体験文は随所に散見されるが、ここでは次の11例だけ列挙するにとどめる。『白百合』誌の付録『エメレンシアナ』：昭和9年2月号所収「無言の宣教」ルチウス神父；同3月号所収「吾が天主よ吾が凡てよ」匿名の信徒；同9月号所収「洗礼を祈れば必ず聴き入れられます」一姉妹；同十月号・十一月号・十二月号所収「御主の御声に」匿名の信徒；同十二月号所収「体験を語る」佐渡 YF 生；同10年三月号所収「筆のまにまに」むらさき・ふみこ；同四月号所収「御恵を思ひて」MA 生；同四月号・六月号所収「主の御声に」岩崎姉妹；同五月号所収「黎明」ML；同六月号所収「主の御招き」MT；同七月号・八月号所収「喜びを」秋田マリア・マグダレナ。

Evangelization by the Catholic laymen in the Meiji, Taisho and Showa Periods

Gen AOYAMA

Since the Second Vatican Council we often hear the word “lay apostolate”. The Japanese Catholics 100 years ago did not know this word. But they seemed to be like the Christians in the 16th- and 17th-century Japan, generally more active than the Christians today. One reason for this is maybe the social unrest and the unsettled social organization of those days. In such an emerging new society, people faced with the various difficulties caused by anarchy would work with all their might in order to build a new world on steady foundations. Christianity could be understood by them dynamically as a special power and guidance from the living Lord God. The other reason is the insufficient number of priests. In the years 1879-1887, for instance, Father Testevuide, MEP, was in charge of a mission consisting of five prefectures, from the Tokyo prefecture except Tokyo City to the Gifu prefecture. Naturally he who was based in the Yokohama church, could just make the rounds walking from town to town, from village to village under his charge once or twice every year in this 400 km long mission area, seeking people who would become Christians. At the almost same time Father Vigroux, MEP, was also in charge of a mission consisting of six prefectures to the north and east of Tokyo.

The present article describes how the Japanese laymen under these missionaries willingly and freely brought their friends and neighbors to the Catholic faith. Some Catholics offered their houses every Sunday as the meeting place for Christians and catechumens. When the missionary visited them, these houses became temporary home-churches for a few days, in which the Mass, baptism and sometimes

wedding ceremony were held. Supported by these activities of the laymen, the missionary could baptize usually more than 30 persons during a trip of several weeks.

The article analyzing this evangelization of the laymen 100 years ago, extracts the following three characteristics: 1. the lively participation of men; 2. pride as Catholics and awareness of a personal mission in the local society, based on their concrete personal experiences; 3. not a few Catholics experienced some real special help of God, often by praying to the Virgin Mary.

Toward end of the last century, however, besides the nationalistic change in Japanese society caused by the promulgation of the Imperial Constitution in 1889 and the Chino-Japanese War in 1894-1895, also the guidance of the Roman Sacra Congregatio de Propaganda Fide, in order to strengthen the unity of the Catholic Church all over the world under the authority of the Roman Pontiff, made the free activity of laymen difficult. Nevertheless, the Catholics in the urban churches of Tokyo City could still propagate Catholicism fairly free, composing some ultra-parochial organizations, like the KOKYO-KYOYUKAI (Catholic Friends Association) founded in 1901, the KOKYO-FUJINKAI (Catholic Ladies Association) founded in 1904, the KOKYO-SEINENKAI (Catholic young Men Association) founded in 1916 and the others. But since March 21, 1931, when the Archbishop Chambon, MEP, of Tokyo announced the order "On the Catholic Action in the Tokyo Diocese" and broke up all ultra-parochial lay organizations, the former lay apostolate has notably declined. The present article also describes this process shortly.